



揖斐川治水フォーラム開催の様子 = 大垣市総合福祉会館（大垣市馬場町）



横山ダム完工50周年、大垣で揖斐川治水フォーラム

先人の足跡たどり、治水への思い継承へ

明治期に私財をなげうち、流域の治山治水に尽力した二人の功績者の足跡をたどり、今後の治水について考える揖斐川治水フォーラム（岐阜新聞・ぎふチャン主催、大垣市、国土交通省木曽川上流河川事務所後援）が10月7日（火）、大垣市内で開催され、市内外から約150人が参加しました。

第1部では、大垣市文化審議会議員の清水進^{しみずすすむ}さんが、「金森吉次郎^{きんしろう}と大垣輪中」と題して講演。清水さんは「金森吉次郎^{きんしろう}（1865～1930）は金原明善^{きんばらめいぜん}の生きざまに感銘し、全財産を投じて、木曽三川（木曽川・長良川、揖斐川）の河川改修や大規模な植林活動などを勧めた。「水を治むる本（もと）は山を治むるに在（あ）り」の考えのもと、治山治水に一生をささげ、金原明善とともに、濃尾地震で荒廃した揖斐川の水源地を調査し、治山事業を興して山地を回復させた。また、明治29年の大水の時の命を掛けた行動が、大垣輪中の多くの人々の命を救った」と語り、「彼ら先人の思いをはせ、我々はこれからも治水意識を持ち続けなければならない」と訴えました。



基調講演を務めた清水進さん



1896年（明治29年）の大水 大垣市藤江町の浸水状況（写真：大垣市立図書館提供）

第2部では、清水さんに加え、金原明善記念館の岡本啓司館長、国土交通省木曽川上流河川事務所の大澤健治所長が加わり、揖斐川の洪水の歴史などを振り返り、これからの治水に向け意見を交わしました。

■金森吉次郎が師と仰いだ金原明善との交流

金原明善（1832～1923）について、岡本館長は「私財を投じて、天竜川の治水工事を手掛けた他、養蚕・牧畜・植林の奨励、銀行の創設、免囚保護など、多方面で近代日本の発展に活躍した人物」と語り、金原と金森との多数の手紙のやりとりを明かし、2人の交流を紹介しました。

岡本館長は、最後に金原明善が残した言葉「金は目的地に達するまでの足である。人は金を貯めるだけが能ではない」と紹介すると、会場に詰め掛けた来場者たちは感慨深い表情で聞き入っていました。



揖斐川の洪水などの歴史を振り返り、これからの治水を考えるパネリスト（写真：岐阜新聞提供）

■揖斐川の治水、先人の思いを継承 「命を守る行動」の大切さも訴える！

大澤所長は、これまで行われたきた木曽三川改修工事の歴史を紹介した上で、現代の治水事業のあらましを説明。近年、ゲリラ豪雨等より、各地で災害が多発している現状を踏まえた上で、「先人の意思を継ぎ、我々は、今後も治水事業を継続的に進めていく努力が必要。大災害には行政のみでは対応力に限界があることを意識し、いざと言う時には、各個人がどう行動したらよいか常に考えておくことが重要。情報化社会が発達した今の時代だからこそ、上手く情報を活用し、自分の命は自分で守る行動に繋げてほしい」と訴えました。

■「見直される輪中文化、地域で培う水防意識」 昔の暮らしパネル展を同時開催！

会場では、「50年前の揖斐川、人々の暮らし」をテーマに、大垣市在住の輪中写真家・河合孝氏（83）が約50年前から撮影してきた輪中の暮らしに関連した写真20点を展示。来場者は、フォーラムに訪れた河合氏本人から、当時の流域住民の暮らしぶりについて説明を受けました。その他、国土交通省木曽川上流河川事務所は、過去の災害や治水対策工事の変遷、ダム事業の効果などを記した説明パネルなどを張り出し、治水事業の必要性を伝えました。



写真家・河合孝氏（右端）から説明を受ける来場者



治水の説明パネルに見入る来場者